

## 平成27年度第1回鳥取市政懇話会

日 時：平成27年8月7日（金）午後2時～4時

場 所：鳥取市役所本庁舎6階全員協議会室

出席者 【市政懇話会委員（16名）】

英義人委員、河毛寛委員、縫谷吉彦委員、川上一郎委員、田中仁成委員、村山洋一委員、田中道春委員、谷口興治委員、佐々木千代子委員、林由紀子委員、小谷文夫委員、山口朝子委員、河原正彦委員、景下明美委員、山脇彰子委員、浅井真由委員

【鳥取市】

深沢義彦市長、羽場恭一副市長、河井登志夫総務部長、田中洋介企画推進部長、田中節哉中核市推進監、下田敏美健康・子育て推進局長、竹氏正順経済観光部次長、井上寿光農林水産部長、神谷康弘教育委員会事務局次長、太田潤一政策企画課長

### 1 開会

### 2 市長あいさつ

本年度第1回の市政懇話会に御出席をいただき、ありがとうございます。

御承知のように、今年は地方創生元年と言われており、今、全国の自治体が、それぞれの地域の持ち味や特性、またいろんな地域資源を生かして取り組みを進めている。総合戦略と人口ビジョンをそれぞれ作っていくということで、本市においても、総合戦略、人口ビジョンの骨子を本年4月に策定して、お示しさせていただいた。今日はこの骨子案をもう少し進化させた素案をお示しさせていただき、いろんな御意見を賜りたい。

また、鳥取市は、合併して10年が経過したが、合併の翌年、平成17年10月に特例市の指定を受けた。昨年の5月に地方自治法が改正になり、この特例市がなくなった。従前は人口が30万人以上の中核市の要件が緩和され、20万以上に変わったわけだが、今後5年間は、従前に特例市に指定されていた市は中核市を目指すことができるといった経過措置もあわせて設けられた。併せて、連携中枢都市連携協約等の制度も新たに導入された。本市は平成30年4月を目途に、中核市移行の準備を進めている。現在、県との調整が大体整理ができ、2,211の事務が鳥取市のほうに移譲される。その中で一番大きな事務が、保健所を市が独自に設置するということである。将来を見据えて今こそ鳥取市はもとより、圏域全体が存続して、将来発展していくためにも必要な選択であると思っている。これについてもいろんな御意見がいただければありがたい。

本日、皆様方からいただいた御意見、御提言を今後の市政に限りなく反映させていきたいと思っている。どうぞよろしくご意見申し上げます。

### 3 会長あいさつ

連日の猛暑で大変お疲れのところお集まりいただき、ありがとうございます。

さて、この会では、昨年度は人口減少問題について議論を重ねてきた。今年度はそれを踏まえて、鳥取市の総合戦略、具体的な施策についての議論に入りたい。

保育園を経営している関係上、雇用問題、特に女性の雇用問題に強い関心を持っている。女性の就業率は20代でピークになり、そして、結婚、出産、子育てということで、だんだん仕事をやめていき、その後、中高年期に再び再就職というM字カーブ現象がずっと続いている。でも実際は、30代、40代であっても、子育て中であっても、仕事をしたい、社会に出たい、自分自身輝きたいと願う女性は本当に多いように感じている。それを阻む

ものの一つとして、子供を預けるところがない。少子化にもかかわらず、この深刻な待機児童の問題が年々深刻化している。原因はたくさんあるが、その中の一つに保育士不足が上げられるのかなと思っている。

先般、厚生労働省が有効求人倍率について発表した。普通の一般職では1を下回り、やはり企業型優位の状態が続いている。保育士という職業だけを見ると、東京都の5という恐るべき数字を筆頭に、鳥取においても大阪をも上回る2.5という数字が出ている。保育士不足の深刻さというのはこの数字にもあらわれているように感じている。この問題に取り組むことによっての何か今後があるのではないかなというふうに感じている。

委員の皆様方におかれましては、それぞれの御専門のお立場から忌憚のない御意見を出していただき、きょうの会が実り多い会になるよう、よろしくお願い申し上げます。

## 4 議事

### (1) 鳥取市人口ビジョン及び総合戦略（素案）について

○河毛委員 「ひとづくり」に関して、いろいろ誘致企業の話があり、非常にありがたく、夢のあるまちづくりができるのではないかなと思っているが、その反面、雇用者数に関して、誘致企業を呼ぶのはいいけれども、本当に人がいるのだろうかという心配がまず1点ある。

その中で、日本の方々の出産がなかなか難しい部分があるのであれば、もっと国際的に目を向けていかなければならないのではないのか。

こういうものはどの市町村もつくられると思うが、その中で、結局は人のとり合いになってしまう。優秀な人間はどうしても都会に出ざるを得ない。政治が思い切って遷都するとか、霞が関の省庁を分割するのであればまだ可能性はあるだろうが、国の基本的なスタンスが変わらない以上、なかなか難しいのではないかな。

ではどうすればいいのかというと、思い切って国際的に目を向けて、海外からの留学生であるとか、あるいは海外からの労働者、アンテナを張る意味においても、海外からまず留学生等を引き入れて、しっかり勉強し、通訳なり文化の交流というものをしっかり覚えてもらってから、その国の方を迎え入れるという形で人口を増やしたらどうかという気持ちがある。単に労働者だけでなく、今、日本は海外からは行きたい国だということもあるし、観光においても、観光というのは一過性のものだが、2日3日泊まって帰られる。留学生であれば長期滞在、3年とか4年されるので、その中で日本のすばらしい文化も覚えてくれるだろうし、そういうものをまた波及できるのではないかな。

やはり何か変わったことをしていかないと、ある意味で、これは市町村それぞれの競争だと思うので、競争理論に勝とうと思えば、やっぱり特異性のあるものをつくっていかないと、なかなか勝てないのではないかな。

日本語学校でも日本文化学校でも、特に鳥取は環境大学等もあるので、せっかく公立になったわけだから、上手な活用ということもこれから視野に入れて考えていけばいいのではないかな。100人、もしも鳥大のように留学生がいれば、掛ける365。観光客まではお金は使わないが、延べ人数で言ったらそれだけの価値があるということを提言したい。

○田中（仁）委員 全体的にこの総合戦略を拝見して、非常に総花的だなというのが印象。行政がつくられるビジョンというのはどうしても市民のニーズを漏れなく最大公約数で取り入れなければならないという宿命があるので、ある程度総花的になるのは仕方がないと思うが、やっぱりやや全体的にめり張りに欠けるのかなというのが一つ。それと、「ひとづくり」「まちづくり」「しごとづくり」ということで、それぞれの分野で議論しましょうということだが、別々に議論することが果たして妥当なのかと思う。「ひとづくり」というのは人を育てるための雇用も必要だろうし、「まちづくり」というのはイコール「ひとづくり」につながるというか、「ひとづくり」と「まちづくり」と「しごとづくり」がそれぞれ別々ではなく、表裏一体というか、三位一体みたいな形なので、そういった表現というか、そういった大きなビジョンみたいなものが見えてくれば、より今の時代にふさわしい総合戦略が、そもそも地方創生なるものがどれだけの効果があるものなのか

が今問われている中だが、そうはいつでも今後5年間、一番鳥取市にとっても大切な5年間になる方向性だけはきちっと出しておきたいというところがあって、あえてそこをちょっと最初に申し上げておきたい。

もう一つ、鳥取らしさというのは那邊にあるのかというところがちょっと乏しいのではないのか。先日、あえて、全く市には関係ない鳥取城北高校の相撲なんか、何か切り口にできないかということをお願いしたが、どうしても相撲にこだわっているわけではないが、これから売り出そうとする鳥取のいいところというのを、全国に誇るものをピックアップするということをさらに意識をしていただく必要があるというのが2つ目。

「ひとづくり」という項目で、僕自身は小学校を4回変わったぐらいの転校生で、余り幼なじみというのはいない。郷土愛があるかといったら、別にないままUターンしてきたぐらいの感じだが、何で帰ってきたのかなど。うちの子も外に出て、1回帰ってきたが、やっぱり郷土が好きだからというか、あそこにこういう自然があるとか、環境がいいということも大切だろうが、人が人を呼ぶというか、友達がいるとか、あるいはあのおじさんと一緒に何かやってみたいとか、あのお兄ちゃんと一緒に祭りに出てみたいとか、あの子の少年野球チームのメンバーが今やっているから帰りたいとか、人のつながりというのが結構大きいと思う。それが乏しいのではないのかなど。郷土のことを育む教育ということも大切だが、例えば極端な話、いじめをなくして、スポーツや文化を通じた友達づくりができるということ、そのことがふるさとに対する愛着を多分生んでくるのかなど思っていて、そこもぜひ項目として何らかの形で打ち出していただければありがたい。

○佐々木委員 冒頭に保育士が足りないという話があった。先日、鹿野町の地域振興会議でも、やっぱり保育士が足りなくて、施設はゆとりがあるのに、子供を受け入れられないという話があった。結局保育士がやめてしまうという話があった。何でやめるのだろうか。もちろん仕事がきついのはあるだろうが、待遇の問題もあるのではないかなど。臨職の人がほとんどで、臨職だからといって手抜きができるわけではないし、子供にとっては同じだから、しんどさは一緒だと思う。その辺、保育士の労働環境の改善も大事なのではないかなと思う。

○林委員 「ひとづくり」に絡んで、郷土愛を育む教育の推進と非常にお役所的な言葉で書かれているが、郷土愛とはどんなものなのかというところから入らないといけない。郷土愛ということばかり言っても、子供たちはそんなに郷土愛を持つわけではない。さっき田中委員がおっしゃられたように、郷土愛は何をもって育めるのかというところになるのだろうと思う。今までもこの会議で出ていたのは、鳥取はとていいところがたくさんあるよと、都会に比べたら通勤時間も歩いてでも会社に通えたり、すぐ身近なところにいろんな楽しめる、わらべ館もだが、いろいろ楽しいものもあつたりするが、これは都会にはなかなかないもの。そういう市民目線というか、県民目線から見ると、鳥取はいいところだよねとみんなが納得するようなものがすごくたくさんあると思うので、そういうものをもう少し外向けに情報発信するとか、小学校、中学校、高校生もそういうものが目に触れることができ、親御さんも見られるようにすると、大学の関係で一遍は都会に出たとしても、やっぱりもう1回鳥取に帰りたいという思いは持つのだろうと思うので、情報発信がまだまだ足りないのかなという気がすごくしている。

郷土愛は、何をしたら子供たちが鳥取に愛着を持って帰ってきてくれるのかというのを具体的に分析した上で、情報を発信する、そういうハンドブックみたいなものを作ったり、漫画でわかるようなものを例えば学校なんかで勉強してもらったりとか、いろんなことがあるのではないかなという気がする。とてもいいものがあるのにみんな気がついてなくて、都会に憧れてしまっていることを思うと、本当は都会の人は鳥取はすごくいいよねと言うのに、鳥取の人はそのことを知らないみたいなどころがあるので、そういうことにもっと力を入れてみたらどうか。

○河原委員 今、皆さんが話をされているのはほとんどUターン、鳥取で育った人は帰ってほしいねという話だと思う。それは非常に大切なことで、どうやって良さを子供のときから知ってもらおうか。郷土愛を育む、これはやらなければいけない。ただ、胸に手を当て

て考えると、今日来ている委員さんのお子さんはどうだろうか。ほとんど出ておられるのではないか、帰ってきていないお子さんが多いのではないかという気がする。だからそれはそれで努力するが、何か施策を打ったから、すぐ凄く改善するということは多分ないだろうなど。

私が着目しているのは、こういう人口の少ない地方の大学、鳥大にしても環境大学にしても、公立化すると、やっぱり全国から学生が来る。結局8割以上は他県から来る。これが来ないようになると多分レベルが下がってきて、またどんどん悪くなるのだろうなど思うので、8割ぐらいを前提に考えるべきだと最近見ている。その中で、幾らがこっちに残ってくれるかというIターンの施策も考えなければいけない。

今日こうやって見せていただいたら、1つだけ新しい施策で、公民館で少しインターシッパして地元の人とやったらという話が上がっていた。こういうのが、前に発言した中の一つのテーマだが、よそから来た人、今、田中委員も言われたが、鳥取に彼女ができたから住もうかなとか、あそこはおもしろいおじさんがいて何か地域で活動したらいいかな、どこか仕事を探すかな、多分そういうこと。ただ、これも少しだろう話が多い。人口ビジョンの最後にアンケートをとっているが、このアンケートの仕方をもっと少し実のあるものにしたほうがいいと思う。これは15歳以上の人からランダムにとって、ランダムに整理しているが、例えば鳥大とか環境大の4年生、就活中だが、彼らが就職を決めるとき、どういう発想で、どこの場所でどんな会社を選んだかというのを市役所と学務とが相談して様式をつくって少し分析をしてみると、彼らがどういう行動でどこに行き、どんな会社へ行ったかというのがわかるので、それを基に施策を打ち出すと、もっと具体的なものになるかなと、こういう一般的な井で集計したアンケートほど当てにならないものはないと思う。

もう1点、今回は人口ビジョンで、例えば2060年のすう勢でいくと12万ぐらいになるのが、何とか施策を打って2万人、将来的に何十年後に上げようということ。そうするためにPDCAが出ているけれども、これは余り役に立たないなど。5年ごとにそんなに変わらないので、もっと違った検証の仕方、施策をいくつ打ちましたというのをやっても効果が出なかったらだめなので、PDCAのところは深く点検をしてみたらいいかなと思う。

**○下田健康・子育て推進局長** 保育士の確保の件で、最初に山口会長がおっしゃったように、保育士は非常に確保が難しい状況、これは公立に限らず、私立も同じ。先ほどもあった臨時職員については、処遇の改善を図るため、2年前から任期付きの採用ということで、3年間だが、一時金とか様々な待遇を正職員に近い形にするようにということで、鳥取市は任期付き職員ということで採用を進めるようにしている。

仕事がついというものは、それぞれの考え方というか、保護者の思いや、現場やいろんなことがあると思う。ただ、保護者から見ると、保育士は資格を持っていて、どの先生が任期付きの先生とか正職の先生かということもわからないので、やはり求められるものは、ある程度のレベルのものを求めていらっしゃるのではないかと思う。

労働環境の改善というのは、やはり多く職員がいれば、それだけ少し楽になる面があると思うが、今、ぎりぎりの状況の中でやっているのだから、今後とも労働環境の改善には努めてまいりたいと思っている。

**○神谷教育委員会次長** 郷土愛について、鳥取市の教育ビジョンの中で、「ふるさとを愛し志を持つ子」というスローガンのもと、様々な教育の取組をやっている。先ほども出たが、例えばいじめ対策とか不登校対策、あるいは学校独自のいろんな活動の支援制度とか、いろいろなことをやっている。鳥取にずっと居続けていただければ一番いいが、それがなかなか難しい。ただ、どこに行っても、例えば都会に出ても、常に鳥取のことを思える、鳥取のよさを知っている、語れる、そんな子であってほしい。もっと言えば、グローバル社会なので、世界に出ても日本のことを、さらには鳥取のことを自信を持って語れ、誇りを持ってもらえるような子供たちになってほしいということで、いろんな施策を展開している。

県外から来た方が、鳥取には何がありますかと言ったら、何もないですということをよく言ったりするみたいだが、本当はすごい、今、まさに鳥取市は「すごい！鳥取市」をやっているが、いろんなすごいものが実はあるが、大人も含めてなかなか気がついていない。やっぱり子供のころからいろんなことを教えていかなければいけないなど思っている。例えば教育委員会が鳥取市の有名な歴史上の人物、「鳥取市の志」という本を制作して、副読本にしているが、鳥取ってこんなにすごい人が出ているのだということを知って子供たちが知って自信を持つということもある。

余談になるが、親類の男の子が東京の女性と結婚して鳥取に初めてやってきた。結婚式は東京で挙げて、鳥取にやってきたが、鳥取ってすごいですねと。何がすごいのかと思ったら、実はスキューバダイビングをしていて、山陰海岸の美しさ、その人は沖縄の海が好きだったらしいが、全然引けをとりませんよということ。そういう世界の人でないと知らないが、鳥取の人ですら実は本当に気づかないものもあるかもしれないが、なるべくそういうことを掘り起こして子供たちに伝えていく。あるいは子供たちも小・中学校の中でふるさとを知る教育というか、研究、例えば自分の校区の特徴とか、そういうものを意識的に研究して発表してもらうこともやっている。そのことが全て人口増加につながるかどうかというのも非常に微妙なところだが、義務教育の中でなるべく子供たちに自分のふるさと鳥取に興味を持って、誇りを持っていただくような活動をしている。

**○竹氏経済観光部次長** 留学生の関係では、経済の観点から、企業への優秀な人材の確保ということから、外国の方の労働力とか、知識、さらには技術、ノウハウ等といったものを十分に活用していくことは非常に重要であるということは認識をしている。企業の国際化、グローバル化、そして外国の高度な人材を鳥取、日本の企業に入れていくということも重要なわけで、本市では、特に鳥大、それから環境大学に留学されている方を対象に、ぜひ市内の企業に就職していただけないかと考えている。

本市の若手職員が提案した事業の一つで、今回、地方創生の国の交付金を活用して何か取組ができないかなということで、今、予算化をしている。具体的には、セミナー等を開催し、留学生等への周知やアピールをしたり、あるいは留学生の方の意向等を確認して、マッチングしたりするなど、外国人の市内への就職ができないかということ今年度取り組んでみようかと考えている。

**○小谷委員** 観光産業に携わっているが、観光産業というのは土日祝日が忙しくて、平日が比較的暇で、日中はそんなに忙しくなくて、夜になると忙しいという、飲食、宿泊はそういう特性があるわけで、したがって、なかなか人が集まりにくいところがある。

例えば、働きたくても小さいお子さんがいるので働けない。冒頭、山口会長がおっしゃった保育とか託児も夕方には閉まる。土曜日、日曜日も閉まっているのでなかなか働けない。実はそういう人たちは一番戦力になってくれる人たちだが、そういう隔靴搔痒みたいところがある。観光産業一般のどこの職種でも大なり小なり同じようなところがあるので、一つは、待機児童がいないというのはもちろんいいが、もう少し日常的な枠を広げるような施策ができないか。その分、例えば保育所なり託児のほうは、そこに雇用が生まれるわけだし、それから、観光産業の従業者の我々もそうすることによって雇用が新しくできる。あるいはどこか昼間働いて、ダブルワークでピークのところの仕事ができるみたいなどころがあり、そういうことが一つ施策の中でできないか。

東京なんかは確かに待機児童の数が非常に多くて、絶対的に足りないが、おのおのの区で見ると、非常にその辺は充実している。ニーズに対して供給が少ないのが東京の問題なので、おのおののサプライのところは、そういうソフト産業に従事している人が多いので、充実しているというのがどうも実態のようなので、そのあたりをもう少し地域の雇用全体でバランスがとれないか。

最近出た観光庁（ガバメントオフィスではなくて、ツーリズムアソシエーション）の統計調査で、観光産業といっても飲食、宿泊、小売、旅客サービス、輸送といろいろあるが、観光産業が仕入れあるいはサービス供給で、その地域の市あるいは町から調達している割合が大体20%、同じ県内で50%という、ざっくりだが、そんな統計調査があつて、特

に宿泊業は同一の市または町から調達している割合が50%、同じ県内からは90%ある。外からもらってきたお金を地域に流しているということがあるので、ただ、そのためにはやはりそれでもって入客数を増やそうとしても、雇用というか、仕事の時間帯的な制限があって、なかなかうまくいかないというのが悩ましいところ。したがって、そういうところを少し緩和できる施策があれば、保育の方も雇用が増えるし、我々の方も助かる面があるのではないかと。

年に2~3回ぐらい鳥取に来られるお客さんが、この1~2年で鳥取はすごく変わったねとおっしゃる。何がですかと聞いたら、スタバができた。スタバができたのはいいけれども、スタバにいるお客さんがみんなにこにこしていると。都会のスタバは、みんな仏頂面でパソコンをたたいたり、面会時間の調整のときに寄ったり、そんなことだけれども、あそこのスタバはデッキテラスのところでおじいさんやおばあさんが3人ぐらいにこにこしながら話をしている。すごくいいねと言われる。そういう点で、この1~2年、「すごい！鳥取市」というキャンペーンもあるし、随分変わってきた。外からそういうふうに見られているのだなと思って、これは自信を持っていいのではないかと思う。

そういうところを生かして、余り自虐的にならずにもう少し自信を持って進めていただきたい。これは鳥取市にぜひお願いしたい。

**○縫谷委員** 皆さんの話を聞いていると、やっぱり変えていきたいという意識をすごく強く感じるので、市も変えていきたい、皆さんも変えていきたいというのであれば、この会議のあり方自体も変えていかないといけないのかなというのをすごく感じている。

それと、例えば先ほどから保育士の問題が出ているが、根本の原因を探してみると、働きたいけれども子育てがあって働けないということの方が問題であって、保育士がいないこと自体が本当の問題ではないと思う。そうなったときに、鳥取市として、他と違ってどういったことができるのか。本当に保育園に預けないといけないのか。さっき言ったことを考えていくと、それ以外の方法が他にないのか。例えば鳥取市で働かされている女性が自宅で仕事をして、そういう環境づくりをしていくことも一つの方法であると思うし、預ける人が必ずしも保育士でないといけないのかという根本から考えていって、やはりそこに切り口をやっていくようなことをしていかないと、なかなか保育士だけ増やそう、環境だけ整えようと思っても難しいのかなと思うので、ぜひそういった新しい考え方とか切り口とか、あいている人、ものを使っていくようなことをやっていくと、まだまだ解決していくのかなということを感じる。

**○小谷委員** 人口動態だが、いわゆる生産人口の推移がどうなるかということがよく見えない。今、多分60歳とか65歳が生産人口になるのだろうが、今後は70歳ぐらいまでが多分生産人口としてカウントされるのではないかと。そのときの、いわゆる高齢者の方はフルタイムではなくてパートタイムみたいな働き方でもいいと思うが、その人口の推移が拝見した限りではよく見えなかったもので、その辺もあわせて、仕事あるいは雇用というところからの切り口で、どんなことが実際にできるのだろうかということ进行分析していただければ。

**○川上委員** 今日のテーマはそのまま農業の問題かなということで、まず、人口問題では、先ほどの分析、予想はほとんど間違いないことだろうと思う。全国共通した話でもある。ただ、問題として残っているのは、一極集中と言われるように、全国的、鳥取県という立場から見ると、鳥取市の位置づけはどうなのかということの分析。もう一つは、同じ鳥取市の中で各地域間の差、ここの問題の分析が、結局全国的な縮図のようなものが鳥取市の中でも起きている。これは農業のほうを担当している者としては、一番切実な危機的な問題と捉えている。

よく分析の中で平均値ということが言われるが、分析していくと、二極化型になってきている。こういう動きがどんどん進んでいるので、それを大抵2で割って平均値で物を言うというのは当たるところが全くなくなると、こういう点が盲点になってしまっているということが一つある。

結局どうするかということになると、戦略の中でどう具体的なものを描いていくかとい

うことになるわけで、農業においては、私自身は理想の政策と現実との狭間というか、物を言えと言え理想を言うが、現実を見ると、もうさめて全然聞く耳も持たない。うそだ、反対だとは言わないけれども、全く歯車の合わない話だと、こういう諦めムードになってしまっている。

農業のほうでいえば、確かに効率のいい農業にするためには、規模拡大ということでもどんどん進むが、現実が高齢化が進んで農業をする人がいないという中で、特に中山間の方ではとてもお荷物になって、儲かる、儲からない以前に、農地はもう要らないと、お荷物だと、ここまで来てしまっている。現実には規模拡大で農地を貸借、出し手と受け手と言われるが、担い手もなかなか見つからないのもそうだが、見つかったとしても、中山間の方の農地を貸してくださいと言う人はほとんどいない。だから幾らこんなことを唱えても、中山間の方の解決には結びつかない。

そういう問題をどうするかといったときに、結局は、昔から原始的とも言われてきていたが、生活と結びついて、つまり定住対策に結びつく農業政策ということになれば、損をするのではなくて、楽しくて、おもしろくて、そこそこ意味があるものだと、こういう農業の位置づけが出てこないかと。それを一人自己完結でということは難しい話だから、JAとか、いろんな組織でそれを支援して行って、小さい農家の人を束ねてぶつかっていくことに結びつくだらうと思うが、そういう部分が非常に政策として、あるいは我々が声をかける場合でも後回しにしてしまって、格好のいい、今日も輸出という形が出るが、輸出を反対するわけではないが、輸出の問題は、今の中山間地の農地のところにどう着地して結びついていくかということまでいかなないと、輸出の意味が全くなくなって、人口が減って、そこから離れて行って、過疎になってしまう。

そう考えると、もっと地域というものを考えていかなければいけない。ところがその地域といって、昔の旧市町村の地域を大体目指して我々物を言おうとしているが、入ってみるともう集落そのものがだめになっている。だから集落でお世話をして、集落の人が合意形成というか、そういう形になっていない限りは、物事を進めようとする人は一軒一軒回らなければいけないことになる。これは何人いても、すばらしいリーダーでも、とてもできない。今、農地利用の最適化推進委員が、腰弁当で回ってもらいましょうというのが農業委員会の中にも設けられることになるが、私も声を大にして言っているが、一向に現実的な形に戻ってこない。それは結局集落の中での昔でいう寄り合いのような、誰か世話をし、それにみんなが協調して話し合っていくような、二十五、六年前に鳥取市でむらづくり協議会あたりがかなり盛んなときは、集落の足場があった。だからリーダーがいて、集落に寄りつける。それが今、集落に行っても誰もこっちを向いてくれる者はいないから、一人頑張っても限界がある。

この面から見ると、市の行政の中で、こういうところに支援をいただきたいと思っているが、集落が一緒になってみんなが、仕組みづくり、そこにまたリーダーを生み出す、そういう基盤になるところができれば、次の地域のリーダーもどんどん活躍できやすいことになる。だから一番の根幹になるところというか、そういうところが消えてしまっている中では、どんなに動いても実らないのかなと思う。

そういう意味で、今申し上げたようなことがもし実現できてくれば、楽しくて、おもしろくてという、生きがい、やりがいのあるようなことが実現できれば、まずは定年退職者がやっぱりふるさとに帰るよということになったり、何らかの形でふるさとを大事にしていくことになると思う。そういうところを、時間もかかり、金もかかる場所かもしれないが、基盤を大事にしていだけたらありがたいと思う。

○英委員 今、川上委員さんがお話しになったことと絡めて、この人口動向分析だが、まさにこれは鳥取市の全体のことだけしか出てない。本来ならば、鳥取市の中の旧町村、それも含めた全体的な人口動向がどうなっているかというのが実は一番大事なところで、人口が増えればいいというものではないということ、それが川上委員さんの言われたことと絡むのだが、要は市の中で、人口が1人の人数が増えるということも僻地のほうの町村で増えるのと鳥取市で1人増える価値というのは全然違う。そういった統計も含めての均衡

的な人口動向、増えるということがすごく大事ではないか。もしこれが例えば人口が結果的に1,000人増えた、でも都市部だけで増えて、町村のほうでは減ってしまったというのでは、結果として何にもならない。まさに今の日本が一極集中になってしまってその状況が出ているわけだが、それを鳥取市に当てはめたときに、2040年、2060年問題の中でその状況を作ってはいけない。これからいろんな分析をされる中で、市をひとくくりではなく、それぞれのエリアで、極端な話、都市部の人口が多少減ってでも、郡部がそれなりにさっきのような動きができるような状況になるなら、それは大いに結構な評価だと思う。その評価の仕方というものを、その物差しの観点を変えていただくことが大事ではないかなと思う。そのあたりの統計とか、そういった部分にも切り込んでいただきたい。

**○田中（道）委員** 英委員とも同調するが、先ほど川上委員のおっしゃっていたことは、本当に痛いほどよくわかる。まちづくりという立場や、あれこれ思いがあったもので、話をさせてもらいたい。

まず、国府町という地域は物すごく縦長で、5つ地区がある。私はガイドクラブのクラブ員でもあり、あちこちから来られるお客様を御案内する。最近、成器・大茅地区に行く機会が多いが人がいない。同じ国府町なのだという実感。宮下地区は旧鳥取市寄りのにぎやかなところなので、本当に静かで違った町を歩いている感じがする。1次産業の掘り起こしといったら本当に大変な問題だと思う。現状はそのとおり。

先ほど郷土愛の話があった。教育的な立場で言うと、郷土に対する愛情とか思いというのは、極端に言うと、10歳を超えたら加速度的に薄れていくのではないか。三つ子の魂と言うが、小さいときから教育しておかないと、高校生や大学生になって、鳥取はいいところだ、こっち向け、あっち向けと言っても向いてくれない。中学校教育ぐらいまで、義務教育までぐらいにしっかり鳥取のことを教えていかなければいけないという思い。鳥取市の郷土愛についての読本とか、いろいろ資料を学校の方に出しておられるが、全く大事なことだと思う。子供たちを小さいときから教育していく必要があるかなと。そして、最終的には仕事の場がないといけない。いいところ、よさ、そういうものをしっかりと周囲が、学校の先生を含めてやったら、人口、これから25年先は鳥取が49万になるということが新聞に出ていたが修正された。3万5,000人ぐらい、上方修正の目標値が49万人だそう。本当はもっと低い数字だったのかなと思うが、これでいくと鳥取市が15万人。これを確保するためにも、何とか頑張っていかなければいけないなど、いろんな要素を含めて、という思いがしている。

**○谷口委員** さっき郷土愛の話があったが、私は、やっぱり郷土愛を子供に植えつけるのは、地域の歴史と文化かなと思っている。御存じの方があるかもしれないが、いなば西郷むらづくり協議会は、この春、地区に伝わっている伝説、15話をまとめた「兵円のあまんじゃく」という絵本をつくった。これは鳥取市の補助をいただいて発行し、850冊出したが、見事に売れ切れた。もう発行しないが、今でも欲しいという声がある。

この一番の目的は、地域の子供たちに地域の伝説を教えたいと。それには難しい、昔の先生が書かれた文章では無理なので、子供への絵本にした。我々が手づくりでつくり、小学校にも100冊寄付したが、非常に有効に活用していただいている。最近、読んで聞かせることもやっているし、今、そのフォローとして、今度は紙芝居をつくって、さらに普及していこうかなと思っている。少なからず子供たちに郷土愛を持たせる一助になっているのではないかなと思う。

それから、川上委員さんの話は本当にそのとおりで、ただ、西郷地区は、比較的今のところうまくいっているのは、国の補助事業、いわゆる中山間地の特殊払い、それから農地・水・環境対策で、水利や農地を管理すると補助金がもらえる。我々西郷地区は、切りかえのときに、各集落でやっていた事業を西郷地区一本に統合した。かなり苦労したが、統合して1地区でやっている。西郷地区全部の農地を対象にしていると、当然面倒を見る者も出てくる。荒らすと補助金対象から外れてしまうので、荒らすことはできない。結果的に補助金で縛ってという部分はあるが、荒廃農地を出さずにやっている。今、この農地

をどう使うかということで、試行錯誤を始めている。おっしゃるとおり、リーダーはいないが、集落ごとだったら無理だが、西郷地区でやればリーダーになる人がいるということで、維持できる場所はある。

今日の資料で、人口がこうして減っていくと聞き、最初に感じたのが、今、鳥取市の財政状況がどうか、人口がこれからも減っていくということになると、当然交付税も減ってくるわけで、そうした市の将来の財政状況を考えた場合に、やっぱり経常経費、いわゆる義務的経費が増えて、政策的な経費がないということは、市政の活性化に障害になる。やっぱり投資的経費の枠があるということが市政の活性化につながると思う。やっぱり財源というのをこれからどうするかというのを大事に考えていかなければいけないだろうと思う。

鳥取市もいろんな公共施設を持っている。我々のところも西郷小学校と西郷保育園があるが、今、小学校が生徒数41人になった。これが60人、100人にふえていくめどはない。一番生徒の少ない学年は3人、多くても10人ぐらい。そうすると、私たちが小学生だったときの同級生とのつき合いとか遊びを考えると、同級生が10人で、そこに男の子が2人しかいないというのでは、かわいそうだと思う。やっぱり子供たちは適正な規模で、適当な数の友達がいて、適当なけんかする相手もいて、切磋琢磨する相手がいることが一つの環境としては大事かなと思う。

ということになれば、やっぱりこういう公共施設の統廃合というのは少し早目に市として手を打ってやっていく必要があるのではないかなと思う。現状を変えることに大抵の人間は反対する。市に対して文句ばかり言うが、税金の効率的・効果的な使い道とか、将来を考えると、こういう将来予想がある限り、不必要なもの、あるいは整理すべきもの、統合すべきものは、政策として手早くやっていかなければならないかなと思う。

それから、「まちづくり」のところだが、11ページに、手仕事の作家の移住推進による工芸村の開設と星印で新しい事業が書いてある。これはそういう作家、生業でやっていける作家を一つの工芸村に集めて、そういうものを作っていこうという構想だと思うが、その候補地として、我々の西郷地区は挑戦してみたいと思っている。我々むらづくり協議会は、通常の5つの部に加えて、この春からはヤドカリ部という部長を作り、空き家対策で調査を始めている。我々のところもかなり数がある。これを何とかうまく活用して、ものづくりをする作家の皆さんに来て住んでもらって、製作活動をしてもらおうということ。

これは我々みたいに田舎の方がいいという部分がある。作家の方は、住めばいいのではなくて、やっぱり工房が要るとか、物置が要るとか、作業場が要るとかあることで、一定の広さとか、それから騒音問題もあったりするので、田舎のほうが条件はいいということもある。3つの窯元もあり、ガラス工芸の作家もおられ、木工の作家もおられるということで、さらに集積を進めていくと。そのためには住む家も用意しようということで考えているが、いよいよスタートして、我々中心にやっていきたいと思っており、ぜひとも鳥取市の皆さんにも協力していただき、県も非常に乗り気であるし、商工会議所も会長さんも一生懸命やるからと言ってもらっているのだから、やっていきたいと思う。ただ、全国を股にかけた作家に来てもらおうと思えば、それなりにインセンティブ、魅力が要る。鳥取県は自然が豊かできれいですといっても、自然はどこにもあるし、清流がありますといっても全国に清流がある。ウエルカムの気持ち、皆さんを歓迎する気持ちはありますといっても、そういうところは日本全国にあるので、それだけでは特徴は出せないということで、我々が今考えているのは、湯谷温泉という温泉がある。これを何とか西郷独自の魅力として売り出したいと思っている。ただ、あれは福祉施設的につくったものであり、温泉は非常に泉質がよくて、お客さんの評判はいい。鳥取市内からわざわざ入りに来ていただくお客さんもあるが、いかにも施設が前近代的で、全国的な皆さんに魅力を感じてもらおう施設になっていないので、何とかこれをもうちょっと魅力的な施設に変えていただくことをぜひともお願いしたい。

さっきの田舎のよさについて、子育てには絶対田舎のほうがいいと思う。ガラス工芸の作家が夫婦で来て、子供が1人だったが、我々のところに来て、もう1人子供をつくられ

た。いわく、子育てにすごくいいと言われる。街だったら、子供が公園へ遊びに行くと、よそのおじさんに声をかけられたらついていってはだめとか、声を聞いてはだめと。我々の村だと全部が知っているから、村中が保護者。非常に安心できるということもある。そういうところは田舎の売りになっていくべきだと思っている。

○**田中企画推進部長** 生産年齢人口ということで、多分これは今15歳から65歳ということで推移は載せているが、恐らくこれが高齢化に従って、経年で非常に高齢になられても元気な方がだんだん増えてきて、例えばこの65歳が70歳にシフトするということは長期のビジョンの中では十分考えられることだと思うが、それを数字としてあらわすという話はなかなか難しいのかなと考えている。

地域ごとの、これまでの分析の中で、当然人口の増減というのは出てきている話であり、ここを人口ビジョンの中に位置づけていくということについては、位置づけ方はあるが、記載することは可能。ただ、それを今後の市全体の人口ビジョンの中で地域ごとにこれを推計する、しないみたいなところはちょっと難しいのかなという気がしている。

○**英委員** 人口分布という言葉を入れながら、盛り込んでもらおうとわかりやすいかな、単なる人口だけで評価するというのではなくてという意味。

○**田中企画推進部長** 具体的な施策の中に、やはり移住定住とか中山間という政策の中で、新市域、または中山間地のほうにも誘導していくという施策は当然考えており、実際問題として、平成18年から1,700人ぐらいは移住で来ているが、新市域の8町村、これが23~24%ぐらいになるところで、思いとしてはやっぱりそういった割合も増やしていきたい。全体に増やしていきたいが。その辺りはまた最終的にこれをくくる中でそういった表現はさせていただければと思っている。

○**井上農林水産部長** 川上委員から御指摘をいただいたとおり。その中でも、谷口委員からもあったように、集落ではもう既に、国府町の木原という集落が全員宮下や谷地区に出られて、住んでおられない状況になっておるところもある。ただ、農地があるので、農作業には帰っておられるという状況。

先ほど谷口委員からもあったように、集落ではまだできないけれども、それが旧村単位ぐらいの、前の小学校校区みたいな範囲内で取り組めば、まだ人はいるよという御意見もいただいた。本当に農業問題、大変な状況ではあるが、そういったこともやりながら進めてまいりたいと思っている。

○**佐々木委員** NPOで3年前から空き家バンクを受けさせていただいていて、今年から、西郷地区と佐治の3カ所に増えた。その空き家バンク同士が連携してよそから来られる方に対応できたら、もっといい具合になるのではないかな。鹿野に来られても、鹿野で空き家が紹介できない場合に、例えば西郷地区に振るとか、そういうことを、今は個別にやっているが、行政も絡んでやっていただけたらもうちょっと効率よくいくのかなと感じている。

それから、鳥取市のUIJターン、住宅利活用推進事業で片づけや改修の費用が出る部分も使わせていただいているが、これが2地域居住に対してはだめ、特に改修の方が。2地域居住、人口が増えないからだめだということもわかるが、さっきおっしゃったように、例えば芸術家の方とか、そういう方たちが、最初2地域居住からで、そのうち気に入ってこっちに住まれるということも結構あると思う。徳島県神山町なんかで聞いてみると、結構そういう感じで行ったり来たりしていた人がとうとう住みついたということもあるので、もうちょっとその辺が考慮していただけたら使いやすい事業になるなと思っている。

それから、やっぱり改修が、鳥取市以外、県外ではないとだめなのか。そういう縛りがあるって、それもせめて鳥取市外だったらいいとか、そういうふうにしてもらえるといいなと思う。それももちろん県の人口を増やしたいということもわかるのが、鳥取県にないから、ではよそに行ってしまうということも考えたら、県内の移動でも意味があるのではないかなと思うので、その辺も検討していただきたい。

○**山脇委員** 「しごとづくり」と「まちづくり」と「ひとづくり」、全部絡まってくると思うが、先ほど河原委員がおっしゃっていたように、大学を卒業してもここに居つかない。例えば浅井委員は県外出身で、環境大学に来ていらっしゃるけれども、彼女が就職すると

なると、鳥取にそういう就職する企業が、魅力的な企業が少ない。公務員はいいと思う。魅力ある企業が少ないというのと、やっぱり賃金体系が他県に比べて安い。今、学生たちはほかの企業のいろんな採用条件を調べて就活する。内定をしても、ほかにどこか魅力ある賃金の高いところに合格したら、そっちに移ってしまう。それに何らかの歯止めをつけたいがためにそういうことをする。

来年入社する子は、今年は学生たちの売り手市場なので、どのぐらいで歩留まりしたらいいのだろうと、採用担当者は非常に悩ましい。なので、市役所、県庁、教員、保育士、いろいろ公務員的な、準公務員はある程度のレベルはもらっていらっしゃるが、一般の企業、鳥取は特に中小が多いので、いい人材を確保していったら、今後将来的に会社を伸ばすこともでき得るのかなというところで大いに期待をしている。そこに女性ももちろん入っていく。

女性も保育士、ワークライフバランスということが今、すごくうたわれているが、これは少しずつの理解ではあるが、産休及び育児休暇はできるようになってきた。ではこれが中小企業の元々従業員の少ないところに育児休暇を理解してもらおうとか、何とか休暇を理解してもらおうと思ったら厳しい現状もあるのかなと思うので、そのあたりの経営者への理解及び、賃金というのは経営においてはとても大変なことだと思うが、それも踏まえてやっていけば、この町で暮らしたい、この町で子づくりをしたいという人が増える。この間、やっぱり賃金がないから、臨職だから、結婚できないという人を聞いた。いつまでも臨時で雇って、自分の生活の安定が図れない。好きな人はいるけれども、その人を守っていこうとするとある程度の賃金は欲しくて、だったら県外に出なければいけないのかなと悩んでいる若者と話をしたが、そういうのを聞くとちょっと切なくなって、これが鳥取の実態なのかなと思うので、その辺も含めて、経営者の英委員等々にはもう一生懸命頑張してほしい。

公務員も臨職で採用するのはいいが、彼女、彼らの次のステップ、一生懸命働いて、ある程度の実績なり能力がある人は、職員登用していくとかというところをもっと積極的にやっていただければいいかなと思う。

あともう一つ、「ひとづくり」というところに関しては、特徴ある郷土にするために、学校もだが、鳥取はすごいというところをもっとアピールしていく。西郷村の手づくりの作家さんが集まる集落になっているよというのが実現したら、それを県外にアピールしていくとか、それから、智頭の森のようちえんがあるが、あれは鳥取市ではないが、ああいう人のいないよさ、田舎のよさを生かしたものができればいいかなと思ったりしている。

○英委員 まさに数週間前にその話が出た。今、中小企業の方で大卒が採用できないということで、今問題になっていて、求人倍率が上がれば上がるほど、商工会議所の中で問題になって、話をしていたばかり。

もう一つの賃金の問題だが、たしか松江の日銀の支店長がレポートを出しておられた。あのレポートに書いてあるように、たとえ初任給が、賃金は低いかもしれないけれども、暮らしやすさとか物価、その辺を全部数字に置きかえたときに、決して都会と変わらないのだよと、もっといいところがあるのだよということをどんどんPRして、単なる賃金を比べるという形ではなくて、暮らしやすさという意味の中の賃金、そういった形で学生に選んでいただけるようなことを考えていくことも大事だと思った。

○山脇委員 鳥取市内の企業の方が、市内だけで採用しようと思うからできないというのもある。だから例えば関西に、学生さんが県外に行っていられるとしたら、大阪の就職セミナーというのか説明会、ああいうところに行って、鳥取はこんないいところですよと、今の英委員がおっしゃったような話をされて、回数をこなすと、もちろんそこには鳥取出身で関西の大学へ行っていらっしゃる人も、こういう会社も鳥取にあったなといってUターンして帰っていらっしゃる方もいらっしゃるだろうし、全く知らない学生たちも、田舎に住みたいという人もいらっしゃると思う。そういうところのアピールをもっとなさったらいいいのかなと思った。

○英委員 今度大阪の方でされるときは、暮らしやすさは変わらないみたいな感じでどん

と書かれておいたらいいのではないか。

**○景下委員** 鳥取の魅力は、私たち住んでいる者は十分存じている。これをどう外部に発信して、鳥取の魅力を知っていただくかということについて、私がここ1年ぐらいで感じているのは、報道の力というのはすごいということ。今年の春のスタバ騒動。あれはキー局の著名人であるレポーターなんかも、どのチャンネルを回してもすなばのこを取り上げていた。ちょうどそのときに関西に行っていたら、鳥取はすごいわねと、すごく元気があると。そのときには、すなばもあるけれどもスタバもあるのよと言った。それから2カ月か3カ月後、広島に行ったときには、広島である方がわざわざ名刺を持って見えて、その後を追っかけ調査すると、鳥取はあのかのときの騒ぎで終わってなくて、1カ月後も2カ月後もずっと行列を組んでいるのではないかと。これはなぜかと、それはみんながこのまま一過性のものにしないで団結してやろうよとやってやったのか、ただのコーヒー好きなのか、両方だとは思いますが、鳥取というのは、トップセールスを、昨年のギネスのしゃんしゃんも世界最大の傘踊りなので、これをもっとメディアに発信して、もっと取り上げてもらっては。たまたま8日から11日間、キャンプでジャマイカの世界最速の男ボルトを初め、パウエル、シェローンさんもおいでになる。期間中はサイン会もあるし、生徒のためのクリニックもあるので、ぜひ皆様、地域に帰られたら、明日から11日間、ボルトがいるよということで、どんどん取り上げていただいて。手っ取り早いのは、もっとメディアリリースをして、メディアで取り上げてもらうのがいい。佐賀の方からも、何年も交流のない方からも電話があり、鳥取すごいと。こういう魅力を少しでも外部の方に知っていただきたいなと思っている。

**○浅井委員** 先ほども何度も若者の話とか就職の話が出ていた。中学生までに3回引っ越したこともあり、郷土愛とかの授業は特に受けていない。いろんなところのを細々と受けてしまったので、中途半端に知っている程度で終わってしまった。先ほども言われていた人のつながりというのはすごく大きいと思っている。就職するに当たっても、人のつながりがあるところに就職したいなというのはすごくあって、人のつながりは安心にもつながるかなというのはすごくある。

大学の中で収まってしまうと、鳥取に住む人たちと関係ができないので、大学を出るといってはすごくいいと思っているが、地区公民館のインターンとか、そういうのも考えられているということだったので、すごく大きなことだと思っている。

環境大学の学友会という学生の組織で、今、津ノ井地区との連携を図っていて、地区の運動会や文化祭などのお手伝いに行くとか、小さな連携かもしれないが、この繋がりがどんどん繋がって、メンバーが変わっても続いていけば、地区とのつながりがどんどん濃密なものになっていくと思うので、続けていってほしいと思っている。

また、空き家の話も何件か出ていたが、この前、鳥取市でリノベーションスクールが行われた。私も参加させていただいた。他にも学生の受講生がもう一人いて、学生のボランティアも何人もいて、空き家に対しての意識を持っている学生が鳥取にはたくさんいるのだなということを実感した。

また、そのイベントの中で、町の中にまだまだ知らないことが多いことと、可能性がたくさんあることに気づいた。今後も空き家の利活用とか、どんどん進めていってほしいし、リノベーションスクールとか、シンポジウムとか、そういうイベントをやってほしいと、学生にも鳥取に空き家がいっぱいあるのだったら鳥取で起業してもいいかなとか、そういうふうに考えが行き届いてほしいなと思っている。

**○村山委員** 具体的に少子高齢化の時代に合った施策という観点で、これからはもう大学生にしても偏差値で輪切りということはほとんどなくなってくるわけで、東大だろうが早稲田だろうが、鳥大も同じ、どこでも入れるような時代になる。初めから鳥取に残る人には、奨学金を前払いして確保するくらいのことをしないと、出てから戻れと言っても戻らない。戻ることもあるかもしれないが、そういう政策をひとつ。子育てについては、保育士が足りないと言うが、本来親が育てなければいけないのをみんな預けている。保育園や幼稚園に行くことがあるが、1歳やゼロ歳の子を保育園に預けている。やはりその対策

として、おじいさん、おばあさんに保育士教育をちょっとして、それで保育園に呼んだりして、そうすれば安心して親は勤めに出られるわけで、同居も促進すると思う。

それと、私も農業をやっているが、川上委員が言われたとおりで、みんなはつきり言って赤字で、所得税の軽減対策で役立っているだけで、生産性も何にもない。本当は作らなくていいが、荒地地になったらいけないということで、税制を考えてもらわないと、市街化区域で農業ができない。米代も全然ならないし、肥料も、米代ではもう食えない。そういう状況なので、それなりの対策をすべきだと思っている。

○山口会長 ありがとうございます。多岐にわたる意見が出たが、それに深澤市長からコメント等、よろしく願います。

○深澤市長 今日本当に多岐にわたり、いろんな御意見いただき、心より感謝申し上げます。冒頭申し上げたように、この人口ビジョン、総合戦略は、骨子から素案になり、完成形は、9月議会の会期中になるが、目標としては来月末ぐらいを目途に完成形に持っていきたいと思っている。当初は来年度からということで、鳥取市の次期総合計画、10次総とちょうどこの期間が一致して、ちょうど具合がいいと思っていたが、国の方が1年度ほど早く作れということ。

今日いただいた御意見、人材確保とか人材育成、それから子育て支援、雇用の問題、また農業のあり方というか、これから存続させて立ち行くようにするにはどうしたらいいか、非常に深い御意見もいただいた。今日いただいた御意見を限りなくこの素案から完成形に持っていくに当たり反映させていきたいと思っている。

地方創生に際して、総合戦略、人口ビジョンをつくるようにということだが、鳥取市は以前から総合計画について、行政評価の手法を用い、数値目標を掲げて、それを1年度ごとに検証していく、いわゆるローリングをして、達成できているかということをやっているの、そういった手法については全国の自治体に先駆けてやってきたと思っているところ。

今、それぞれの自治体の力量が問われていると思っているが、いろんな折に他の市の皆さんや自治体の皆さん、それから県外の企業の皆さん、いろんなお話、御意見を伺うが、やっぱり鳥取市はこれから将来に向けてまだまだ伸び代があるというか、非常にポテンシャルがある、可能性がある、そういった地域であると改めて思っている。そういったことをいかにこれから生かしていくかということが今まさに問われているのではないかなと思う。以前は鳥取駅に降りられた方にどこかいいところはないですかと聞かれたら、市民の皆さん、鳥取はどこもええとこってありませんと、こういった返しをしておったと。それもよくわかる、自分自身も。そういったことではなくて、やっぱり今、鳥取に残っているいろんな特性、それから地域資源、みんなでそれをいま一度共通認識、共通理解して、いかに生かしていくのかということは今やっていく、そういったときにあるのではないかなと改めて思っている。

ジャマイカのお話も出た。明日から早速ということだが、この春にリカルド・アリコック大使と話をさせていただく機会もあったが、ジャマイカの皆さんは非常に鳥取のことを気に入っておられる。それは豊かな自然が残されているということと、もう一つ盛んにおっしゃっておられたのが、ホスピタリティーというか、おもてなしの心、それが非常にすばらしいと。そういったことをおっしゃっておられたのが印象に残っている。また、気に入ったので、ぜひとも8月に来たいということもおっしゃっておられたので、恐らくこのキャンプ期間中には来ていただけるのではないかと、できたらしゃんしゃん祭も参加していただけるのではないかなとも思っている。

そういったことをどんどん生かしていかないといけないし、もっと発信していくことが必要ではないかと、PRが少し下手ではなかったのかと自分自身も含めて思っており、一つの契機として、「すごい！鳥取市」とか、シティーセールスの拠点を設けるとか、そんなことを一つ一つやっているところだが、今年度、来年度、さらにしっかりやっていきたいなと思っている。

人口推計等についても、新市域、それから旧市、いろいろやってみたらどうかという御

提言もいただいた。そういった視点でこの総合戦略も新市域のいろんな魅力づくりとか地域の活性化、いろんなメニューもこれからしっかりやっていきたいと思う。均衡ある鳥取市の発展に向けて、これからも、皆さんのいろんなお知恵もいただきながら、しっかりと取り組んでいきたいという思いを新たにさせていただいた。今後ともよろしく願い申し上げます。

○山口会長 ありがとうございます。それでは、中核市の説明をお願いします。

○田中中核市推進監 冒頭、市長が挨拶の中で御案内させていただいたように、鳥取市は現在、平成30年4月1日の中核市移行を目指している。中核市というのは、現在の大都市制度の一つで、政令指定市に次ぐ規模の都市。この3月までは人口30万人以上ということだったが、この4月から地方自治法が改正になり、人口が20万人以上であればいいということになった。同時に、鳥取市が属していた特例市という制度は廃止になったということで、鳥取市はこの中核市を目指していこうと、現在取り組みを始めたところ。

この中核市移行の取組の目的とするところは、市民サービスの向上と、山陰東部圏域の発展の基礎をつくっていききたいということ。中核市になると県から多くの事務権限が市のほうに移ってくるわけで、現在のところ2, 211事務について県と調整を進めているところだが、最後のページの地図をごらんいただきたい。鳥取市が現在中核市の取組を進めているが、この地図で見えていただくと、日本海側の中で福井から西で中核市の要件を満たすのは鳥取市と松江市だけ。このうち松江市は鳥取市と同じ平成30年4月1日を目指して、今、中核市の取組を進めておられる。また、全国には現在、平成30年前後、この中で中核市を目指して、今、総務省のほうに登録して取組を進めている都市が20市ある。さらに、その他の都市についても現在調査を進めているという状況。

そうした中で、この地図を見ていただくように、山陰地方の拠点、これは鳥取と松江だから、ここで鳥取市が中核市にならなければ、鳥取、山陰東部圏域と言ったほうがいいと思うが、山陰東部圏域の拠点性が薄らいでしまうということで、この拠点性が薄らぐことにより、将来の鳥取市のインフラの整備、そして企業誘致、産業、生活基盤の確保とか、そういった社会インフラの整備が遅れかねないということを変に懸念している。今後、将来を見据えると、やはりここは中核市として、そして中核市は国の方で連携中枢都市という位置づけになるが、そういった拠点として存在感を高めていく必要がある。

鳥取市が現在人口20万人を切っているので、この5年間、特例措置が設けられており、5年間であれば人口20万人を切っていても特例市だった都市は中核市になることができるということになっている。これは平成32年3月までの5年なので、鳥取市は何としても中核市として山陰東部圏域の発展をリードしていく、そしてまた山陰東部地域発展の基盤をなしていくという意味で、現在、中核市移行の取組を進めている。

○村山委員 今、連携中枢都市というのを初めて聞いたが、これについて、中核都市とは言わず、中枢都市ということになるのか。中核都市になるための中枢というか、その辺がちよっとわからない。問題は、大きくなってもいいが、そのマンパワーが県からそっくり職員が来るならいいが、来ないなら、県は暇になるし、こっちは忙しくなる。鳥取市はものすごく大きな合併をしている。中国でもナンバーワンの合併をしており、そうすると、ばらばらになるような気がしないわけでもないわけで、中核だから、役目を果たせろと思うが、その辺、人の受け入れはどうなっているのか。

○田中中核市推進監 資料の3ページの上のところに記述させていただいているが、中核市になると、この中核市を中心として、周辺の自治体と一緒に連携中枢都市圏域というのを形成することができるようになる。全国で連携中枢都市圏として、国が想定しているのは鳥取を含む61地域ということだが、鳥取の場合は鳥取・因幡定住自立圏の取組をはじめ、東部4町、そして新温泉町も含めて連携した取組を進めてきているわけだが、これをさらに発展的にこの連携中枢拠点都市圏として一緒に取り組んでいこうという制度がある。これに対して国が財政面、あるいは政策を集中することによって、この圏域を維持、発展して、経済のけん引や、生活基盤の整備など、一つの固まりとして支援していこうという制度が連携中枢都市の制度。

もう一つ、人材の確保だが、これは大変重要なことと思っている。中核市の事務として県から来る事務のうち、その大きな部分は保健所を設置する事務。これについて、県は現在、鳥取圏域、4町6圏域を保健所として持っているが、これが鳥取市に来るということで、それにあたり、県からの人材の派遣、交流、そういったことも含めて、市民サービスのレベルに低下を生じないように、円滑な移行ができるように、今、そういったことも含めて県と調整を進めている。

○山口会長 御意見がなければ、本日の議事を終わらせていただく。

○田中企画推進部長 その他として、お手元にうちわとしゃんしゃん祭のチラシをお配りしている。うちわは3Dのプロジェクトンマッピングということで、まさに明日から16日まで。御活用方、よろしくお願ひします。皆様がお出かけになられたらもっとうれいので、よろしくお願ひします。本日は、これで閉会します。